

「解剖学カラーアトラス」第3版

Erlangen-Nürnberg 大学名誉教授 J. W. Rohen 共著
 神奈川歯科大学名誉教授 横地 千仞

山形大学教授・解剖学第一

外 崎 昭

Erlangen-Nürnberg 大学と神奈川歯科大学の解剖学教室が所蔵する膨大な解剖学標本を、ステレオ写真を初めとするカラー図版の形に編集して、A4判472頁に盛り込み、惜しげもなく公開するのが本書である。これによって、人体解剖学を学ぼうとする若い人々、医師、研究者が、自ら両大学にあるがごとく、またとない学習機会を与えられるというわけである。

1991年11月、私は、Ulm 大学医学部の Hermann 教授と Hannover 医科大学の Pabst 教授および Grube 教授の解剖学教育の現場を見学することができた。“すべてのドイツ国民が等しい水準の医療サービスを受ける権利があり、すべてのドイツ医師が等しい力量を備える義務がある”—この国是は、解剖学の講義、実習、演習のプログラムに誠実に盛り込まれている。人体解剖学も組織学も、関連分野との連携も含めて、事細かに系統・細分化され、国家試験マニュアルとの対応が図られている。

むろん私は、この計画性に傾くドイツ方式が理想的であるとは考えない。しかし、国是に従う教育プログラムがあり、それを実施する教員陣が汗を厭わずマニュアルを編纂し、教材とカリキュラムを準備するありさまには、ほとほと頭が下がった。それと共に、学生の学習機会が、豊富な標本と図書によって十分に与えられ、それらを維持するばかりでなく、新しく作製する数名の専門技術者が確保されていることが、極めて印象的であった。

かつて、わが国の帝国大学は西欧先進国の例に学んで形成された時代、大学の研究と教育を支える技術集団が必要であり、図書館および博物館という記録・業績と標本の蓄積・公開機能が必要であることを学んだ。戦後の公務員定員削減政策の進行と共に、大学の庭から、ガラス工、機械工、画工の姿が消えた。一方、司書らしい司書、秘書らしい秘書というもの、いまだにその存在すら疑わしい。図書館が刊行物の大半

の購入を諦め、退職教授の業績・標本は廃棄物と化するのが実状であろう。

このような日本の大学の中で、横地教授の標本作製にかける熱意と豊かな経験は、常に異彩を放ち、多くの尊敬を集めてきた。本書の前書きによると、Erlangen-Nürnberg 大学との提携は一朝一夕のものではなく、多数の専門家がそれぞれ数年滞在して、標本の図版化に取り組まれたとある。

学問の府が備えるべき基本的条件を守るドイツの実力を紹介し、わが国の大学政策に警鐘を鳴らさんとするのが、あるいは横地教授の真の狙いではなからうか。本書の解剖学参考書としての価値は、初学者、教育者、医師、看護・介護の専門家が、それぞれの実力と必要に応じて、直ちに感得されることであろう。

● A4上製 514頁 図24 写真129
 原色図753 色図166 1994 定価
 12,360円(税込) 〒600

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)